
キセキはここにある

ひろにか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキはここにある

【Zマーク】

Z68090

【作者名】

ひろにか

【あらすじ】

テレビアニメ『ミラクルトレイン～大江戸線へようこそ～』の最終話をあかりちゃん目線で。最後の彼女の笑顔には、どういう意味があつたのか。そのへんも自己流解釈で説明してます。

(前書き)

あかりちゃん視点で『ミラクル トレイン』大江戸線へようこそ
そ～『最終話のいくつかのシーンを書いてます。六あか・・・と見えないこともない話。ラスト2話のネタバレと、六本木ととくがわ以外の男性陣が出ないので、そのへんにご注意下さい。

不思議な不思議な地下鉄。

だって、お客様がちつともいなくつて。人に見える6人の男の人たちは、実は駅で。

あれ、なんでわたしはそんなことを知ってるんだろう?

わからない。

一番小さなおじいさんを、どうして年下だと思つんだらう。
未来のわたしは、なんで今より子どもなんだらう。
どうして赤毛のおじいさんを、懐かしいって思つんだらう。
わからない。ちつとも、わからない。

えーっと、わたしつて何歳だっけ?

・・・いいや、とつても楽しいから。

あれ、何だか明るくなってきた。もう朝?

キセキはここにある

わたしの寝付きが悪いのは、寝癖の直りにくい髪質と同じで生まれつき。

赤ちゃんの頃は寝たくないとぐずぐずつてこたと、お母さんから聞いたことがある。

でも、寝起き悪くなかったそうだ。

確かにわたしは低血圧ではない。けれどいつの頃からか、起きてからしばらく頭がぼーっとして、なかなか動けなくなっていた。

その理由が、やつとわかつた。

『わたし』は、わたしに 地下鉄の中の自分によつやく追いついたんだ。

* * * * *

「ガラガラだあ・・・」

小さな『わたし』が、無人の電車内に困惑して立ちつくしている。不安なのか、握りしめた手を離そうとしない。ふらついていた青年 生まれたばかりの六本木さん を支えるためにつないでいたはずなのに。

でも、無理も無い。

真つ暗なホーム。不思議な男の人。突然やつてきた電車。そこに乗つたら、乗客は奇妙な格好の男女だけ。

こんなに色んなことが一度に起こるなんて、普通では考えられないことだもの。

わたしは、あの子を戻してあげないといけないんだ。現実 彼

女の人生へ。

でも、どうしたらいいのだろう。自分とはいえ、向こうはそんなこと知る由もない。初対面の人間の言つことを聞いてくれるだろうか。

「安心して。ホームに戻れば平氣だから」

不安を和らげようと、笑顔で、出来るだけだけ優しく声をかける。

すると、昔のわたしは顔を上げてこっちを見上げた。

そこで、視線が交差する。

目と目が合つた。

その瞬間、もやがかかつたように朧げで、思い出せなかつた記憶がふつと甦る。

そうだ。わたしはここで、きれいなおねえさんに会つたんだ。

不安な気持ちは、その人の優しい笑顔に不思議と収まつて。それから

おねえさんは、わたしと手をつないで電車から一緒に降りてくれた。

そつか。そうすればいいんだ、と理解する。

六本木の方を見ると、うん、と頷いてくれた。わたしが帰り

道を見つけたことをわかつてくれたのだらう。

立ち上がる時に取つてくれた手から、この人の気持ちが伝わつて
くるような・・・そんな気がした。

でも。

次の瞬間、六本木さんは、そつと手を離した。

わかつてる。この人は、わたしのことを思つてそうしてくれてい
るんだ。

わたしは、今ここでの電車 ミラクル ブレイン を降り
ないといけない。

そうしなければ、わたしは現実に戻れなくなる。
ミラクル ブレインも暴走して、仕事が出来ない。

それはつまり、困つている人を助けることも叶わないということ
だ。みなさんも困つてしまつ。

それは、ダメだ。悩める淑女の手助けをするのが、この地下鉄の
使命なのだから。

恋した人のため、一生懸命鉄道の勉強をした少女。
大好きだったお父さんの死を、お母さんと一緒に乗り越えていこ
うと頑張つている女の子。

可愛いもの好きの自分を受け入れた男の人。

親友と離れるとしても、自分の道を選んだ占い師さん。

恋人を突然独りにしてしまったことを気に病んでいた、幽霊の女

性。

他にもたくさん、悩みを抱えた人たちの力になってきた。

わたしが大好きなのは、そんなミラクル トレインなのだから。

意を決して少女の手を取ると、記憶通り怖がられたりはしなかつた。

開いたままのドアに向かって一歩踏み出す。すると、不意に足先に何かが触れた感触が伝わってきた。

「これ・・・」

開いている右の手で、足元のそれを拾い上げる。
ピンク色の帽子。わたしの・・・ガイドの帽子。
電車が止まる時の衝撃で、頭から落ちてしまっていたようだ。
かぶろうとしたところ、足元のもう一つの存在に気が付く。

「とぐがわ・・・

『行きな、あかり』

別れの挨拶をするかのよひ、黒い毛並みの小犬は「わん」と鳴いた。

つぶらな両目がじっとわたしを見ている。

犬のこの子は、おしゃべりしたりはできない。けど、妙に仕草が人間くさくて・・・実はわたしたちの言葉も事情もみんなわかって

るんじゃないかなって、わたしは密かに思っていた。

手に持っていた帽子をそつとかぶせてやる。
思ったとおり、サイズは全然合ってなくてぶかぶかだった。頭が
すっぽり埋もれてしまつて、前がほとんど見えないだろ？
しかし彼は大人しくされるままになつていた。

「ありがとう」

世話をしていたのは自分のはずなのに、何故かそんな言葉が出た。
この子の存在を、心のどこかで支えとしていたのは確かだけれど。
でも、このお礼の言葉はそれに対してだけではなかつた。上手く
思い出せないのだけど、このとぐがわに助けられた気がするのだ。

もしかすると、わたしが思つている以上にこの子はずじこのかも
しれない。

それならちよつと良かつた。頼み事をするにはもつてこいだ。

「その帽子、今までのお礼にあげます。大事にしてくださいね」

そう言つと、機嫌のいい時の「わん」が返つてきた。『おう、任
せときな』って感じかな？

身体が揺れたことで、帽子が傾き隙間から瞳が覗く。
わたしはそのとくがわの眼をじつと見つめた。

「 お願ひね」

「この言葉は、帽子についてではなくて。みんなのこと。
みなさんが頼りにならないってことじゃない。みんなとっても優
しくて、記憶の無いわたしはすぐ助けられた。
車掌さんだって、みなさんやミラクルトレインのこと何より
大切に思つてて、懸命に守つていてる。

心配する」となんてないのはわかっているけれど。
でも、もう一緒にいられないわたしの代わりに見ていてほしくて。
・
・

それを聞いたとぐがわは、黙つて頷いた。・・・・なんだか、
ほんとうにわかつてるみたい。

思ひにふけつていたら、左手をくいつと引かれた。

いけない。

幼い自分が不安気にこつちを見上げていた。

「ゴメンね、すぐ・・・」

謝りうとしたら、彼女（自分のだけれど）は「ううん」と首を横に振る。

言いたいことは、ほつたらかしにされたことについてでは無いようだ。

その目は、まだ覚醒しきっていない青年　　人の姿を得たばかりの駅　を見つめている。

「・・・ねえ、あの男の人・・・」

その心配そうな顔に、励ましの言葉をかけた。

「大丈夫だよ」

満足に立ち上がることもできない青年は、六本木さんが支えてくれている。

「でも・・・」

まだ心配そうな少女に、じつそりと囁く。

「また会えるよ。あなたが大人になつたらね」

ダイヤグラムが歪まないよう」、車掌さんがどうにかしてくれるのだろう。今にも消えてしまいそうな彼だけど、未来で無事にいる。その彼と、わたしははずつと一緒にだった。

先のことになるけれど、わたしは無事この人と再会できる。それは絶対なもの。

え、と瞳をぱちくりさせるかつての自分に、わたしは自信を持つて笑いかけた。

「や、帰らつ
「うん」

少女は素直に頷く。

これは大人になった今も直らない、わたしの癖。本当に納得した時は、つい「うん」と返事をしてしまう。さつき六本木さんにもそう言つちゃつたけ。

小さな手を握つて、わたしはドアへと目を向いた。
最後のつもりで振り向く。まだ、六本木さんにはちゃんとお別れを言つてない。

・・・お別れ・・・。「さよなら」って言えばいいの?
違う。わたしが本当に言いたいのはそりじゃない。一番、伝えたいことは・・・・・

「ありがと」

届いた声に、はつと顔を上げる。

六本木さんが、真っ直ぐにわたしを見ていた。

「本当にありがとうございました。僕をここに連れてきてくれて。僕は、この、今の自分の生き方がとても好きだ。仲間がいて、困っている人を助けることができる。出会えた人たちが笑顔になつてくれた時、本当にうれしい」

彼は、かつての自分に目をやつた。そして続ける。

「でも、一人じゃここに来れなかつた。この人生を見つけて、生きていくのは、あくまでおかげだ」

名前を呼ばうとしたけれど、過去のわたしに聞かれないよう言い直したみたい。

ちょっと不器用な、そんなところが六本木さんらしい。とっても。

「だから君にも、君自身の人生をちゃんと生きてほしい。笑つて生きてほしいんだ」

真っ直ぐわたしの目を見つめて紡がれる言葉。

普段はあんまりしゃべらない六本木さんが、懸命に心を伝えようとしてくれている。

それがわかつて、すくぐうれしかつた。
だから、わたしもこいつ返す。

「 ありがとう」

そうだ。

これが本当に伝えたかったこと。

記憶は戻ったけれど、何だか実感がなくて。それに、ミラクルトレインの中での毎日があんまり楽しくて。
だから、この場所を守るためなり、記憶を消されるのも仕方ないつて思った。

でも外の記憶が無くなっちゃったら、六本木さんとわたしが昔出会ったこともまた思い出せなくなっちゃう。

それは 悲しい。

そんな大事なことを忘れてしまつてこりだつた。もう少しで。
だから、お礼を言わなくけや。わたしの大切な思い出を守つてくれて、ありがとう。

それに、「さよなら」はおかしいって気付いた。

『わたし』たちはまた出会つ。

そして『わたし』はミラクルトレインのガイドになつて。それから

* * *

列車はだんだんとスピードを上げ、ホームから遠ざかっていく。わたしは少女の心の一部となつて、その景色をじつと見ていた。

その地下鉄の進む先は真っ暗で、何も見えない。でも、わたしは知つていて、そこに、ちゃんと線路が在るんだつて。

あの電車の行く先は、未来。

大勢の人々が日々を生きる東京の街。そこで困つている人の力になる、そのためにここより発射したのだ。

そして、その線路は『わたし』の未来とも繋がっている。

追いつくんだ、『わたし』はあの列車に。

長い時間はかかるけど、それでも。
と。

そう思つた途端、睡魔が襲つてきた。

そつか、でもそれまでは眠らなくちゃ・・・

不思議とそれがわかつた。

わたしはこの子 過去のわたし

からすれば、未来の記憶を

持つてしまつてゐる。

心の中で好き勝手しては、きっとまたダイヤグラムを歪めてしまふだろ。ひ。

だから歸るんだ。20歳のあの日まで、この子の中で静かに時を待とう。

あの、奇跡の電車での楽しい日々を、夢見ながら。

* * * *

それからずつと夜の眠りの中で、わたしあみなさんとの思い出を振り返ってきた。

それは何度も繰り返しても飽きなくて。

でも、朝になつても余韻から覚めやらず、過去の『わたし』は起き抜けにぼーっとしてしまつた。

起きると同時に、夢　　未来の記憶　　は再びわたしの中に仕舞いこまれる。

そのせいで、昔の自分を少し困らせてしまつた。低血圧でもないのに、急に寝起きが辛くなつてしまつたのだから。

けれど、それももう終わり。

* * *

今日は休日。

会社へ行くわけじゃないから、目一杯おめかしてきました。

だつてみなさんば、この姿のわたしはガイドの服しか知らない。
だから、大人っぽくお洒落したところを見せて、びっくりさせ
やおひつじ。

・・・ってダメダメ笑つたら！ わたし、変な人みたいじゃな
い・・・普通に普通に。・・・・あ、いけない、通りすぎちゃつ
た？

足を止めて、ぐるりと振り向く。

実はちょっと緊張してるんだけど、それを顔に出さないように。
・ できているのだろうか？ ちょっと自信が無い。
だって、あちからすればこの間のことでも、じつからすれば
すつじく久しぶりなんだもの。
懐かしい気持ちで胸がはちきれそうだ。

みなさん、お変わりありませんか？

都庁さんは、やっぱおどこの広がりを感じますか？

新宿さんは、相変わらずお客様に優しく声をかけてますか？

丹島さんは、今日ももんじゃを焼いていますか？

両国さんは、江戸っ子気質で威勢がいいますか？

汐留さんは、今も子ども扱いされてムキになっていますか？

車掌さんは、謎の仮面を外さないでいますか？

とくがわは、わたしの帽子を気に入ってくれましたか？

六本木さん、「ショーマイ」って書いてくれた、あの頃のあなたのままでですか？

…………きっと、そりなんですよね。何となく、わかります。

あなたは、あの時の言葉を守ってくれた。

۲

でも、わたしもずっといたんですよ。過去の自分の中で、目覚めの時を待っていました。

ダイヤグラムを歪める」となく、みなさんで覚えるように。とてもとても長かった・・・など、よひやへいの田が来たんです。

振り向いた先の正面にまっすぐ顔を向ける。

普通の人にとっては、そこはただの壁でしかない。でも、わたしにとつては違う。

うれしくて、思わず顔が綻ぶのがわかつた。

見えますか？わたし、笑つてゐるでしょ？

この笑顔は、あなたのおかげなんです。

ねえ、六本木さん。わたし、ちゃんと覚えてるんですよ。

終わり

(後書き)

最終話を見た勢いで（その頃から使つてたアメブロの方に）書いてたら、話そのものより最終話の考察の方が長くなつていきました（笑）。それはともかくこの後の六本木さんとあかりちゃんは、時々会つたりするのも幸せでよいのですが、互いの思い出だけを胸に同じ街でそれぞれの人生を生きていく、というのも美しいと思うのです。・・・幸せなのも良いですがね！（念押し）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6809o/>

キセキはここにある

2010年11月3日06時45分発行